

①

私にとつて自殺は自我の完成である。自己意志の發現であるとまでは思ひません。私にとつて自殺はいよいよ情熱のために破船せねば成らぬと、切迫つまつた瞬間に辛うじてる消極的の勝利なのです。今度自分が死を決するに至つた心状をいろいろ振りかへて見ましたが、私は貴方とお話をして居る時、又は手をとつて歩いて居る時などは、とても死ぬ氣には成れない。死を決行する勇氣はない、又涙などは何うしても出ない。けれども抱擁された瞬間涙は直に出る。同時に死の決心は成る、又實行も出来る。あの瞬間に殺されるのなら私は平然として一番容易な死に方をする。自己意志の發現だとまでは信じられない。更により強き我がわれの上にあると思ふ。今度私があれば死を決したのは、あの當時はどこまでも最後まで戦つたと思つたけれど、死を決するに至つた動機を更に考へれば、或意味に於て敗北であることは明かである。それは恐怖と不安と苦痛とに連も堪へ切れなく成つたからです。決して強いものではない。最後に貴方のお手に避難所を求めた譯に成る。つまり奮闘の途中に於て恐怖と不安とがあまりに切實に迫つて来たので、實は進も堪へられないから死ぬ氣に成る。ですから抱擁されて居る時、最も不安な時で、そして最も情熱の熾烈な時に死にたい。尤も是は私の思想の結果ではない。私の頭は寧ろこんな死に方では承知せぬ筈である。だから私は家出前切に心配したのである。若し貴方と相對して居る時に砲口を向けられたら、私は屹度自己防禦の態度をとらずには居られまいとも想像して見た。戦へるまで腕力であたらうかとも考へた、又意力をもつて平然として殺されて仕舞はうかとも

考へた。自殺するよりも其方が容易には相違ない。けれども甚く敗けたやうな氣がして来たのでした。それで口惜しまぎれに、御覽でしたか、あの遺書をした。あれは自分で自分を偽つて見たのである。同時に貴方へ當てつけたのです。時に手紙を造る氣に成つたのも同様の氣持からです。それと最一つあの遺書をして置けば、もし或事情に迫つたら自殺をする勇氣も出るかと考へたのでした。貴方は私がかまか世間を相手にあんな遺書をしたものとは思つて下さるまいとは思ふが、私は誓つて云ふ、あれは貴方へ當てつけたのである。

②

貴方に願つて置きます。私に關する一切の發表の自由を御任せいたします。重ねて申しますが、今回私のいたしたことは何處迄も私の所有である。他人の所有を許さない。——子のしたことである。いかに不名誉な形容詞を世間から浴せられたからとて、——子の名まで抹殺することは許さない。私が悪いことをしたならしたので、私が責任を持ちます。其御心配はして下さいませぬ。改めて私に關する發表の權利を貴方一人の御手に總て譲ります。私は生涯眞の自己を自ら他人に語ることは有るまい。一切貴方に御願ひいたします。母のことは御安心下さい。又私も今迄云ひ得なかつたことを云ふことが出来たから、今後は決して見苦しい狂ひやうはしませんから、これも御安心下さい。

小島様
御許に
あの女の名

③

私は私である。世間とは獨立して居るつもりです。私が今度やつて来たことは、私にとつては曾てない大事業である。この経験は生涯私の所有である。何んな事があつても抹殺するわけには行きません。これだけの努力は非常な價値を産んで居る。私の一生はそれだけ値打を優したのである。事實は事實ではありませんか。世間が何と云つたとて、二人して違つて来たことは有る儘の事實である。誰が何と云つたとて、二人の間の事實を揉み消す力がある筈はない。私は堅く左様信じて居た。この事實は二人が所有すべき特權がある。私は一分一厘でも抹殺されるのは遺憾で成らない。私は何迄生涯の所有として居るつもりである。私の胸には深酷な悲痛をとて、云はれない位感じて居る。こんな悲痛を書いたものは未だ世間には有るまい。私は貴方に向つておの權利はないけれども、貴方を藝術家として深く信じて居ただけ、私は此前の御手紙と今度の御手紙とに對してはいよいよ失望せずには居られない。勿論勞れていらつしやる貴方の御手を勞して自分のことを小説にしてくれなどと厚顔しいことは云はないまでも、この悲壯な生き

た小説をせめては二人の所有として生涯持つて居たいと思ふ。これだけの希望を置いて居たものである。それだけに近頃貴方の御心に持つていらつしやる悲劇と私の持つて居る悲劇とが別々のものになつて来た。私はそれが残念で、とてもたまらない。

④

「何卒仰有つて下さい、何でも構ひませんから——私も一思ひに云つて下さつた方が可い。」
「何んな事でも。」
私はそれ限り黙つて仕舞つた。
女も癡乎と見返して居たが、其儘身體をずらして、相手の兩腕の間に顔を埋めた。それが如何にも狂人の残酷な心から、男を誘惑して、同じ道に引込まねば置かぬ、一緒に狂ひ死にせねば置かぬと云ふ様に見えた。
私は上からそれを見下したまゝ、只一つこれが聞きたい、これを聞かぬ間は——と云ひかけて、又口を噤んだ。
女は目の當り落ちて来る打撃を待つやうに、靜乎として動かなかつた。
「貴方の口からこれを聞きたいと思つたのは、何も昨日今日のことぢやない。貴方と云ふ人を知つた初めから——貴方は最初から自分でアブノーマルな女だとは云つて居た、女ぢやないと云つた。併し其精神生活の異常といふのは両親にも友達にも云へぬやうな性質のものか。如何しても家族とも朋友とも離れて行かねば成らぬやうな——」
女は聲と私の腕を掴んだ。
「そして私一人にそれを明かして呉れたのか——いや、最少し判然云つて下さい。貴方は自分でマニヤクだと云ふのか、あのエロトマニヤクだと——ね色情狂だと云ふのか。」
何とも名狀の出来ぬ、抑殺したやうな聲が聞えた。それと共に、夏薄の洋袴を通して、ぼたぼたと煮えるやうな涙の跡に滲むを覺えた。
私は斧を振上げて人殺しをした様な心持がした。これから如何成るか云ふ考へもない。只癡癡の様に波打つ女の胴體を眺めて居た。

「私はこれが云ひたかつたのだ」と、良少時して口を開いた。「それぢや、貴方はそんな事を何時から知つた。何時から自分でそんな徴候が分つたのです。」
「小さい時から、未だほんの子供の時分から——其時分から違つて居た。」
「そんな時分から今日迄——誰にも云はずに隠して来たのですね。」
女は黙つて點頭した。
私は目の當り受苦しつゝある、魂の崇巖を見るやうに思つた。あゝ女は勞れたのだ、自己のマニヤと闘ふのに勞れたのだ。

⑤

「私は如何成ることぞ。あの女は去つた。行先も分らぬ。縱令分つたとしても、僧院の塀は高くして入り込むことを許さぬ。石垣に頭を打付けて血反吐を吐く外はなからう。私はそれでも机の前を動かかなかつた。良ともすれば戶外へ飛出して、足の向いた方へ行つて仕舞ひたい様な氣がするのを、呢と怵へて動くまいとした。これが一年前なら、私は直様飛出して、街の中を着て顔して彷彿つたものだ。うろと河庄の店から突出された治兵衛の様に、世の中を呪ふやうな眼附をして——併し今日はそれ所ぢやない、そんな眞似をして濟まされる譯のものぢやない。一生の一日の様に思はれる、切めて今日一日だけでも一人で居たい。一人でしみる、此寂しさを味つて見たい。」

只、私は如何成ることぞ。あの女は去つた。行先も分らぬ。縱令分つたとしても、僧院の塀は高くして入り込むことを許さぬ。石垣に頭を打付けて血反吐を吐く外はなからう。私はそれでも机の前を動かかなかつた。良ともすれば戶外へ飛出して、足の向いた方へ行つて仕舞ひたい様な氣がするのを、呢と怵へて動くまいとした。これが一年前なら、私は直様飛出して、街の中を着て顔して彷彿つたものだ。うろと河庄の店から突出された治兵衛の様に、世の中を呪ふやうな眼附をして——併し今日はそれ所ぢやない、そんな眞似をして濟まされる譯のものぢやない。一生の一日の様に思はれる、切めて今日一日だけでも一人で居たい。一人でしみる、此寂しさを味つて見たい。」